

新刊紹介

Oscar Cullmann,

Petrus: Junger-Apostel-Martyrer,

Zürich: Zwingli Verlag, 1952, SS, 282.

Peter: Disciple-Apostle-Martyr,

tr. by Floyd V. Filson,

Philadelphia: The Westminster Press, 1953,
pp. 252.

バーゼルとブリで新約學と古代教會史を講ずる *Christus und die Zeit* 以來世界的に有名になつたクルマンの新しい研究を紹介する。

本書は二部に分けられ、前の部分で主の弟子、使徒、殉教者としてのペテロに關する歴史的研究、後の部分でマタイ傳十六一七一―一九に關する釋義的・神學的研究がなされている。

一部は更に三つに分けられる。先づ主イエスの在世中に於て弟子ペテロは十二弟子達の中で如何なる地位を占めていたか述べ、彼はこのグループの指導者ではなく、代表者或は代辨者であつた

とする。次に原始教會では使徒ペテロは最も初期のエルサレム原始教會の指導者（單獨監督的な支配ではないが）となつた。しかし間もなくエルサレム教會の指導權はヤコブの手に移り、ペテロは教會の委託をうけそれにしたがつてユダヤ人傳道の指導者としてエルサレムをはなれた。この章に於てクルマンはペテロとヤコブ及びパウロの關係、更に所謂使徒會議の問題について従來のテュービンゲン學派の假説を訂正しつつ穩健で洞察にみちた歴史研究をしている。更にペテロがローマに於て殉教したという傳説については考古學的研究よりは否定的・肯定的いずれの結論も得られるが文献學的研究よりおそらくこの傳説はうけ入れられてよいと論じている。

問題として興味あるのは第二の部分である。

先づマタイ傳のこの箇所は共觀福音書の傳承としてどの部分に位置づけられるか、それはイエスの眞正のものか、イエスの約束は全時代の基督教會にかかわるものとして意圖されていたかという釋義的歴史的研究がなされる。第一の問題については、この箇所がマルコ傳との對觀や前後の文脈から浮きあがるわけでそれはルカ傳二二二一―二四にある受難物語の部分として組み入れられるべきである。ここでクルマンは様式的的研究方法を採用しているがマタイ傳のこの箇所を復活物語の中に入れたブルトマンの説を斥け、むしろルカ傳の方からヨハネ傳二二一―二五、マルコ傳の失われた結尾も理解さるべきだとみる。

第二の問題に對してはクルマンはその眞正性を主張する。イエ

スの用いた *enkainia* という語を彼は K. Schmidt の用語研究にもとずき舊約の背景からみて「神の民」の意味に解し、その意味からは受難のメシアたる自意識に到達していたイエスが新しい「神の民」建設を考えられたとしても不思議ではないとする。更に主イエスは自らの死後神の國到來までに一つの期間を考え、神殿の崩壊と手を以てつくられざる神殿の建設を豫言するのみならず在世中に既に十二人の選定と派遣をなしてこの世に於ける神の民建設の基礎をつくりたまうた。イエスが自らの中に神の國の現在が先取されたものとして、その完成を將來に考えていられた以上この業はより至當なものとなる。更に「陰府」は死者の國であるから死と復活によつて死に打勝つた主イエスの働きから考え得ることでありこれが使徒ペテロにゆだねられた。「つなぐ」「解く」という罪の赦しの問題も同様である。

第三の問題については釋義上イエスがここで誰のことを考えていたかを問題とする。それはペテロの信仰でも基督自身でもなく使徒ペテロその人であつた。この見解が宗教改革者達の磐をペテロの信仰とする主張と相違することは云う迄もないが又ローマ・カトリックのペテロの他にその繼承者を入れる見解とも異なる。無限の將來に續くべき教會に有限な殉教する使徒ペテロをその基礎として主が置きたまふことは聖書の示す救済史のくりかえされぬ一回的出來事であつて、その後の教會に如何なる適用がなされるかは釋義とは區別して考えねばならぬ。

さてこの適用の問題であるがクルマンは自らの歴史的・釋義的

新刊紹介

結論にもとずいて次のように説く。主イエスより教會建設の磐たるべき委託をうけたのは使徒ペテロであつた。そこで使徒概念が考えられねばならぬ、使徒とは在世中のイエスと生活を共にしてそのメシヤ的活動に協力し、且その魁えりの目撃者として宣教にたずさわつたものである。それは決してくりかえされぬ獨特のものでこの基礎の上に教會は建てられるべきである。後世の監督達が使徒權を繼承するというとき、時代の發展としてその機能を繼承しても、その獨特の本質を繼承することは不可能である。では後の教會が使徒ペテロの基礎の上に立つとは如何なることかと云えば、彼が語つた「使徒の言」即ち使徒的文書の上に立つこととこれによつて教會は使徒的教會となる。

使徒ペテロの活動については前にみた如くである。彼は主イエスの約東通り教會の最初の磐となつた。ローマ・カトリックはペテロをローマの監督としてローマ教會の全體教會への指導權を主張するが、ペテロが全體教會を支配したのはエルサレムに於てであつてそれ以外の土地ではない。ローマが實際支配權を持つたとしてもそれは後の時代の事で啓示の根源としての「使徒の時」に於てではない。

クルマンはその序言にも述べているようにこの書をローマ・カトリックの神學者達にささげ、彼等との話し合ひの餘地を見出さうとしている。彼はそのため殉教者ペテロの章に百頁ちかくを費し、又最後の章は彼等の主張を問題研究の出発點としている。實際彼が研究の過程に於て立てた假説には從來のプロテスタント

のそれと異なりカトリシズムと共通するところがある（ニコラム J. K. Adam, Das Wesen des Katholizismus）にも拘らず最後の章で彼等と相違した結論に達せざるを得なかつたのは彼の救済史觀の故であらう。

基督敎の救済の歴史に於て基督—使徒ペテロ—教會という時がくりかえされることの出来ない一回的出來事だというのが彼の根本主張である。ローマ・カトリックは使徒ペテロの權威を高調しつつ結局それを教會の時の中に解消してしまつた。しかしこれらの時が無關係にあるのではない。教會は使徒の言或は使徒的文書の上に立つ使徒的教會でなければならぬというクルマンの見解はしかし聖書論の見地から再吟味されねばならぬ。又教會の指導に關して使徒ペテロは Vor- und Urbild であつたという意味についてクルマンはローマ・カトリックとの對決のあまり積極的にとりあげていない。更に基督—使徒ペテロの問題であるが救済史の中に使徒の時を入れたことは前の著 Christus und die Zeit (Bibl. SS. 126—153) に比して新しい主張である。この問題についてクルマンは神學的吟味を怠つていないだろうか。又たとへば基督が教會の隅の首石であること使徒ペテロが教會の磐であることは時間的 (chronologisch) に區別して理解するべきであるとし (S. 244) 長老や監督は時間的な意味で使徒の後繼者であつたか本質的には (dem Wesen nach) 彼らでないとする (S. 246)。したがつて基督の教會の基礎たることと使徒のそれとの本質的區別はどこにあるかという問題が残されるわけである。

それはともかくとしてクルマンのこの綿密な歴史研究と一貫せる神學的主張はプロテスタントの神學界に新しい波紋をおこすであらう。

(土肥)

Emil Brunner,

Das Ewige als Zukunft und Gegenwart,

Zürich: Zwingli Verlag, 1953. S. 240.

組織神學の分野から基督敎終末論の全般に涉つて取扱つた書物はアルトハウス (P. Althaus) 以來最近世に現われなかつたが、これはエーミール・ブルンナーによつて彼の神學系統の一環として終末論の問題全般に就て書かれた著作として注目し値する。彼の神學の全容をうかがい得るものとしては戦後彼の敎義學が刊行せられており終末論に關しても當然この一連の敎義學の最後に取扱わるべきものであるが、彼の來日によつて中斷されている爲歸國後改めて着手されることである。ところでこの準備的勞作とも云うべきものを敢て執筆した所以のものは、勿論一つには現代の神學的状况から判斷して彼本來の神學的立場をこの方面の問題に於ても展開することに對する彼自身の内的要求によるものであらうが、今一つは一九五二年の夏彼の末子トーマスが鐵道事故によつて急死するという痛ましい事件によつて此の種の科學的解決が彼の人格的生にとつて焦眉の問題となつたという強い直接的